親鸞聖人の教えと越後の大地

世田谷区　鎮西　昶（木田出身）

法然上人との出会い

親鸞聖人は、九歳の時に出家得度し、比叡山で二十年の間、厳しい修行を積まれました。

しかし、そこでの修行では真実の救いを見出せず、二十九歳の時、比叡山を下り、聖徳太子の建立と伝えられる京都の六角堂に百日の参籠をされ、吉水教団の法然上人のもとをたずね、

『ただ念仏して弥勒にたすけまいらすべし』という一言を聞き取られ、本願念仏の仏道に目を開かれたのです。

法然上人を師として歩み出された聖人の日々は、決して平穏無事というものではありませんでした。吉水教団は当時の仏教教団の反感と弾圧を受け、師・法然上人とともに親鸞その人も連座して、越後の国府に流罪になりました。

これが、『承元の法難』（一二〇七）であり、聖人三十五歳の時、今から八百年前の三月であったと伝えられています。

これを仏縁として、上越市では、流罪八百年法要と記念事業が営まれています。

権力闘争の禍に翻弄される都人が、専修念仏の教えを禁じた不当な権力への押さえることのできない怒りと、都から離れる孤独感とを胸に、上越市の居多ヶ浜に上陸されたのでした。

親鸞聖人は、この我等の故郷・上越市で四十二歳まで、人生の最も多感で重要な時期を過ごされたのです。この非難弾圧は、これまで仏教の名をかかげてきた旧仏教の諸教団の教えが既に時代にあわず、すたれている姿であると親鸞聖人は見抜かれ、「本願念仏の仏法のみがこの苦難の世を生き抜いていく力を人々に開く眞の仏道である」との確信はいささかも揺らぐことがありませんでした。

愚禿の名のり

越後で出会われたものは、思いの及ばぬ世界でありました。それは過酷な自然条件であり、富みや権力とはまったく無縁の「いなかのひとびと」であり、人間としての生命を赤裸々に生きている人々の姿でありました。それを目のあたりにした時、聖人は妻・恵信尼公や子ども達とともに文字通り「肉食妻帯」の一生活者となり、「愚禿釋親鸞」と名のりをされたのです。

この越後の七年間の年月は、親鸞聖人の教えに如何なる影響をもたらしたか、親鸞の研究家たちがさまざまに述べています。

たとえば、「一般に、流罪人には、ひとり一日につき米一升塩一勺が与えられるが、あとは自分で種を植えて自活するのである。京都では〇門徒からの浄財で生活されておったであろう聖人にとって、汗水をたらして、土を耕し、種子を撒き、水をやり、肥料を施し、収穫することは、とてもつらかったにちがいない」と。

又、「語るに友なく慰めの師もなく、降りしきる雪に耐えながら生活しなかればならない越後の陰鬱な気候は、人をしてひたすら内省の方向に向かわせる風土的必然性をもっている。

この風土が、親鸞聖人のように人生への偽りなき徹底と真実なるものを求める真摯な性格を深刻化せずにはおかなかったに違いない」と。

八百年の時空を超えて

越後に流されて五年目、親鸞聖人は赦免をうけましたが、聖人は京都にはもどらず、四十二歳の時、本願念仏の教えを縁ある人々に伝えることをみずからの使命として、常陸の地に移られました。その生涯を通して、越後での七年間の生活と民衆との出会いこそが、〝念仏者・親鸞聖人〟を誕生させたと言って良いでしょう。

あれから八百年の時空を超えて、親鸞聖人の〇門徒に勝手に思い込んでいる私にまで、〝往生浄土の仏道〟が伝え届けられました。

この長い年月の間、それぞれの時代にいのちがけで念仏の道を求め続けられた多くの善知識のご苦労があった事を憶念する時、都会生活の便利さと豊かさの中に埋没し、惰眠をむさぼりながら念仏を称えている愚鈍な私一人のあり方が断罪される思いであります。

人知を過信するあまり、ますます混迷と荒廃を深める現代社会にあって、〝世の中安穏なれ〟と願わざるにはいられません。

合掌